

The image is a promotional cover for the game 'Tentacle Travelers 3'. It features two anime-style female characters. The character on the left has long red hair, a white sailor-style hat with green tentacles, and a red bikini. She is holding a blue sword. The character on the right has long red hair, a blue and silver armor-like outfit, and is holding a large blue shield. The title 'Tentacle Travelers 3' is written in a stylized green font across the middle. Above the title is the Japanese text 'ランタクルトラベラーズ'.

ランタクルトラベラーズ
Tentacle Travelers 3

「こいつら……多すぎる……!!」

行方不明者を探してほしいという
クエストを受け
ダンジョンへ赴いた環。

しかし、そこは触手型モンスターの
巣窟となっており、あまりの数の多さに
逃走している最中であつた。



「や……! ヤダっ! そんなものにかけてこないで!」
追ってききた触手達が次々と環に向かって
液体を浴びせかける。
みるみるうちにドロドロにされていく
その肢体に刺激されているのか
触手の動きも活発になつて
いるようだ。

「このままじゃ……どうしよう……振り切れるまで
がんばるか……それとも身を隠すべきか……」



「は…離し…てっ！」

小部屋に隠れてやり過ぎそうと思いつたままではいいが、逆に待ち伏せされ、あつといふままに体の自由を奪われる環。

「あつ！だ…だめっ！そんなとこ…！」

次々に絡みついてくる触手に抗おうとするも抵抗空しく全身を拘束され足を大きく開いた格好にされた。



「ああ……そこはだめえっ！やめ……っ！くああっ！」
足を開かされ秘部が露になつたところにて
勢いよく触手が迫り、無駄な抵抗を試みるも
一瞬で貫かれ悲鳴をあげる環。

粘液塗れの触手はレオタードを物ともせず一気に
環の奥まで貫くと激しく突き上げる。

「あうっ！あううっ！激しいっ！
ダメ……！やめ……ああっ！」



「あつ！あうつ！あうつ！あうつ！あうつ！」

触手の猛攻に喘ぐ環。
そして不意にその攻撃がとまり奇妙な痙攣をする触手。
その行動に気付きたまらず叫ぶ。

「だめえつ！それはつ！出さないで……つ！
あつ！あああつ！」

そんな事などお構い無しに触手は凄まじい勢いで
環の中へ液体をぶちまけた。





中に大量に注ぎ込まれ、そのシヨツクで少し意識を失つていたが、すぐにまた激しい突き上げが始まる。口のほうにも触手がねじ込まれ上下でせめられていた。

「むぐらう……! おぐつ! むおつ! おぶつ!」

くぐもつた声を出しながらも必死に抵抗する環。だが、それが無駄な行為であることは明確であつた。

「んぐおおおおつ！おぶうつ！おぶうつ！むぐおおおおつ！」

また触手の大量射精が環を襲う。今度は下だけだけでなく上のほうも注ぎ込まれ口の中はあつといふ間に液体で満たされるがそれでも止まる気配がない。

回の端から溢れ出ているものもの
それでも収まらない液体を
処理する方法が飲み込む以外になく環は一心不乱に
飲み込んでゆく。ごくごくつと喉を鳴らしながら
飲み込み、その射精が終わるのを耐えていた。



「う……うえええ……おぶ……あああ……」

口元の触手が引き抜かれ環の口から大量の液体が溢れ出る。飲み込みきれなかつたものを滴らせながら呻く。

しかし、依然として下の方は射精されつつづけている。
「ああ……まだ……でてる……まだ……出されちゃう……」

周りを見渡ししながら、まだこの陵辱が終わらないことを朦朧とした意識の中で感じていた。





どれくらい時間が経ったのか。未だに終わることなく触手達による陵辱は続いていった。すでに諦めたのか環の瞳には光はなく完全に身を任せている状態であつた。

「ああう……また……たくさん……注がれちゃつた……でも……気持ち……いいから……良いかな……。」

触手の責めに完全に屈服した環。触手達の苗床になり孕むのも時間の問題である。

「こんな…私をどうするつもり…！」

足を大きく開かされ宙吊りにされる環。抵抗してつもりなのか体を一生懸命に動かすが艶かしく誘っているようにしか見えなかつた。

それに反応したのか、怪しく動く触手が環に襲い掛かる。蜜を溢れさせるあの場所へ。



「あぁんっ！」

大きく悲鳴をあげる環。
太い触手が一瞬で一番奥まで侵入してきたのだ。
そして始まる激しいピストン。

大きな胸をぶるんぶるんと揺らし
環の体は激しく上下される。

「あっ！あっ！あっ！あっ！あっ！あっ！あっ！あっ！あっ！あっ！」



「イクうつ！イクイクうつ！イクうつちやううつ！」
環の叫びに反応するかのようには触手の動きも
より激しくなり、とどめを刺すかのようには
突き上げる。

「あああああああーっ！」

大きく声をあげ、絶頂を迎える環。

それを見計らったように

一番奥で射精を開始する触手。

どぶっ！どぶっ！と大量に注ぎ込んでゆく。

「あふあああ……うんん……んおお……ん！」

触手が環から引き抜かれ、ごぼっつと音を出しながら液体が溢れ出る。荒い息遣いで艶かしい声をあげながらその余韻に浸る環。

「……ハア……ハア……ま……まだくるの……？」

下方で蠢く触手を眺めながらも、なんとか脱出の機会はないか模索しようとする。



不意に周りが暗くなり辺りを見渡そうとする環。

「え…なんか…辺りが暗く…？なにが…」

そう思ったときには既に遅く脅威は真上から来ていた。



不意に周りが暗くなり辺りを見渡そうとする環。

「え…なんか…辺りが暗く…？なにが…」

そう思ったときには既に遅く脅威は真上から来ていた。



上から襲い掛かってきたものは環の上半身を
一気に飲み込んだ。

「ぐもおおおっ……うぐ……っ！んぐお……！」

下ばかりに注意を向けすぎて上からくるとは夢にも
思わなかつたのか、環は自分の不注意さに
嘆こうとするも、今はそんな場合ではない。
くぐもった叫び声をあげながら必死にもがく。
しかし下半身だけではどうしようもなく
無様にジタバタと足を動かすことしかなない。



上から襲い掛かってきたものは環の上半身を
一気に飲み込んだ。

「ぐもおおおっ……うぐ……っ！んぐお……！」

下ばかりに注意を向けすぎて上からくるとは夢にも
思わなかつたのか、環は自分の不注意さに
嘆こうとするも、今はそんな場合ではない。
くぐもった叫び声をあげながら必死にもがく。
しかし下半身だけではどうしようもなく
無様にジタバタと足を動かすことしかなない。

そうこうしてしている内に
体はどんとどんと飲み込まれてゆく。

「……ア……うお……っ！ん……。」

後は足先だけが見える状態になったときには
もう身じろぎもせず
ぐったりとしたようになっていた。

「……」

もはや叫び声も聞こえず、環を完全に飲み込んだ
そのモンスターはゆつくりと
ダンジョンの奥へと消えて行つた。

「この粘液…離れない…! こんな格好で動けないなんて…」

そのモンスターは環に粘液を絡みつけ手足を広げた状態で固定させた。

「んん…! 取れない…! こんなもの…!」

必死に抗うもまったく身動きが取れない状況に困惑する環。その状況の中モンスターは目の前まで迫ってくる。



大きな袋状の部分から触手が伸び環の秘部を粘液をこすりつけながら撫で回す。

「や…やめてっ！どろどろを擦り付けないでっ！」

ささやかな抵抗を試みるも、この姿ではただ腰を振っているだけにしかならず

その姿に刺激を受け

触手の動きも活発になる。

そしてひとしきり愛撫した触手は

ゆっくりと環の中に侵入し始めた。

「あああ……っ！入って……くるうっ！

挿入された触手はゆっくりと環の中を
探るように動き始める。

「あうう……あ……っ！

なにを……しようとしてるの……？」

疑問に思う環はふと袋状のものを見つめる。
その半透明な物体の中に丸いものがたくさん
入っていることに気付く。

「あれは……？もしかして……卵……？……まさか
私にあれを産みつける気……？」

そう気付いたのも束の間

「んあああつ！何かが私の中に……！」

その卵が環に送り込まれ始めた。

太い触手の中を通り次々と大きな卵が環の中へと産みつけられてゆく。

やだあ……やめて……やめて……産み付けないでえ」

無駄な懇願をするもひとつ、またひとつと送り込まれるのをただ必死に耐えるしかなかった。



やっと産卵が終わったのだらうか。
目の前の空っぽになった袋状の
部分を見つめ環は嘆く。

「あああ…産み付けられちゃった…
たくさん…いやあ…誰か…誰か助けて…」

いつもの気丈な彼女からは考えられないほど
弱りきり悲観にくれる環。
しかし、その願いは誰にも届かない。
その小さな声も闇の中へ吸い込まれていった。

その後環はモンスタ一の巢に持ち帰られ
その床として利用されていた。
その場所は巢穴が複数あった
その一つ一つに苗床となつた
女性がおおり叫び声や
喘ぎ声がかきこえていた。

環も既に何回かの出産を経験し
今はまた大きくされたお腹の中に
卵を送り込まれていた。



「あうっ！あうっ！あうっ！あぐうっ！
また…！入っってくるうっ！
卵がつっ！あひいっ！気持ちいいっ！」
完全に苗床にされた環。快樂に溺れ
自分が何者かすらも考えず
ただひたすらに喘ぎ、叫ぶ。

「もっ！もっ！もっ！もっ！もっ！もっ！
産みますうっ！産みたいのおっ！」
以前の凛々しかった面影は一切なく、
苗床のひとつとなった環は
ここで永遠にモンスターを
産み続けるであろう…。



触手に散々陵辱された後、
ダンジヨンのとある部屋に運ばれ
培養槽に環は入れられていた。
周りにも複数ある培養槽の中には
行方不明になった女性達の姿が見える。
ここはその女性達を
モンスターに変える施設だった。

環を含め、どの女性も
触手のようなマスクを着けられ虚ろな表情で
培養槽の中で佇んでいた。



しばらくと怪しく発光する触手が現れた。
股の間から怪しく発光する触手が現れた。
環の間に怪しく発光する触手が現れた。
次々と女性達を貫いてゆく。



「おぐうっ！」

「あうっ！」

「ああうっ！」

次々と悲鳴をあげる女性達、環も例外なく貫かれ奥まで満たされる。



The image depicts three anime-style female characters standing in a dark, green, cavernous environment. Each character is nude and has a green tentacle-like appendage in her mouth. The character on the left has short blonde hair and blue eyes. The character in the center has long purple hair and green eyes. The character on the right has long blonde hair and blue eyes. The background is filled with large, dark green, bulbous structures that resemble tentacles or organic growths. The overall lighting is dim, with a greenish tint.

そして始まる変化の儀式。
挿入された触手は杭打ち器のように動き
女性達をゆつくりと突き上げてゆく。

特殊な力が働いてるのであるだろうか
体内の触手が発光し外側からでも目視できる。

それが明滅しながら女性達を刺激していった。

「おうっ！おおお！？おぐおっ！おうっ！」
環を含め女性達の喘ぎ声が変わった。
それと同時に触手の輝きが変わり
より激しく光を放つ。

ピストン速度や体中に伝わる光の衝撃が
変化したのだらう。

その衝撃による味わったことのない快樂に
女性達は獣のように叫び続ける。

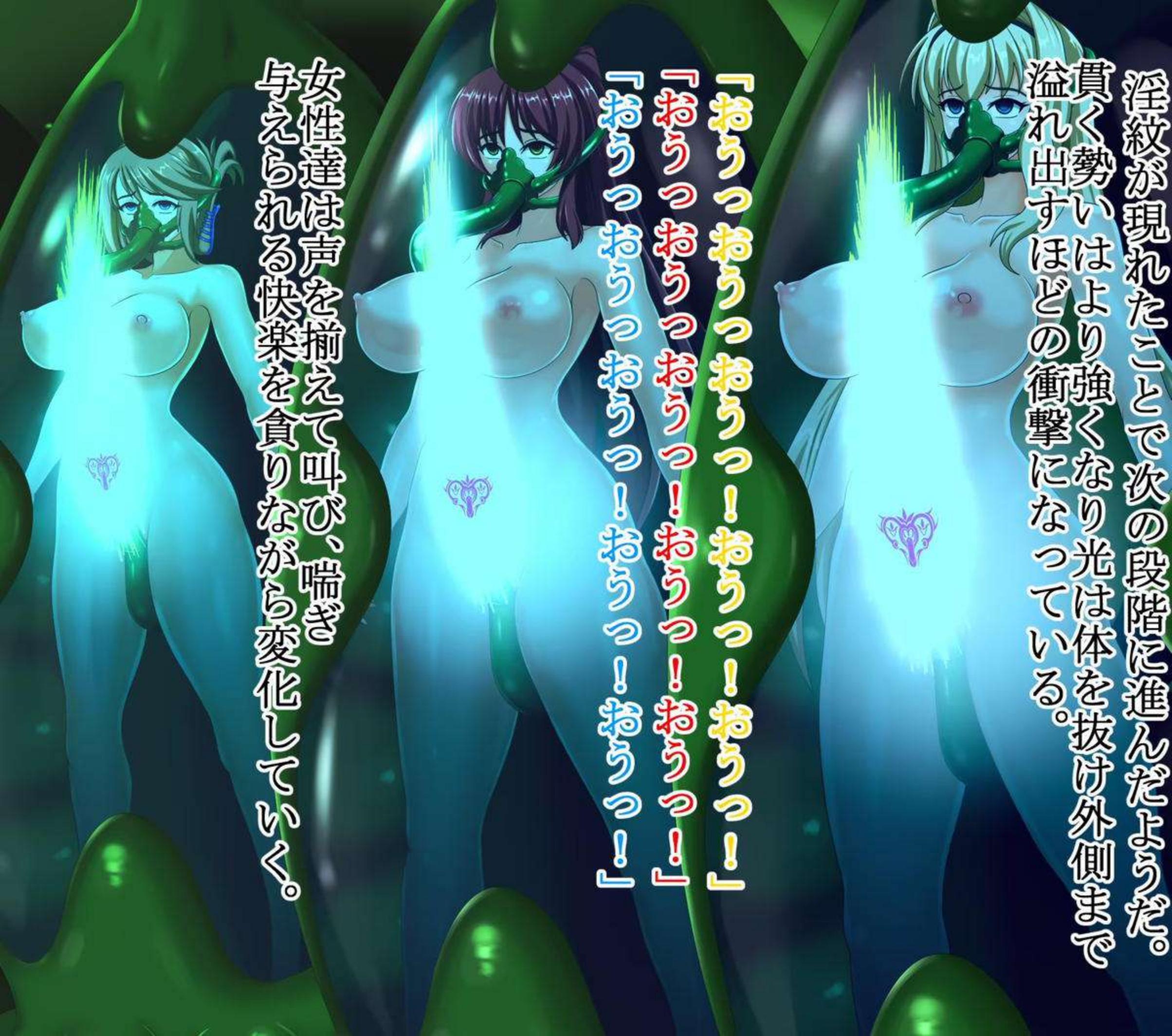
「おおっ！ぐおんっ！おぐっ！おおおっ！」

The image depicts three anime-style women standing in a dark, green, cavernous environment. Each woman is being held or restrained by thick, green, tentacle-like appendages. The woman on the left has short blonde hair and is holding a blue vibrator. The woman in the center has long purple hair. The woman on the right has long blonde hair. All three women are unclothed and have a glowing purple, heart-shaped tattoo on their lower abdomens. The scene is lit with a strong green glow, creating a moody and intense atmosphere.

触手が挿入され快楽を与えられてからしばらく経つた頃変化が訪れる。

お腹の部分に紋様が現れ始めたのだ。順調に変化が進んでる証拠なのだ。このダンジョンとの契約の証なのだ。

この淫紋が完全に刻まれたときに女性達は完全に変わっているだろう。



淫紋が現れたことで次の段階に進んだようだ。
貫く勢いはより強くなり光は体を抜け外側まで
溢れ出すほどの衝撃になっている。

「おうっおうっおうっ！おうっ！おうっ！」
「おうっおうっおうっ！おうっ！おうっ！」
「おうっおうっおうっ！おうっ！おうっ！」

女性達は声を揃えて叫び、喘ぎ
与えられる快樂を貪りながら変化していく。

変化も佳境に入ったようだ。環達の体の色が青くなっている。大分モンスタ―化が進んだ証だ。険しかった表情も穏やかになり、快樂をより貪っている。

環も人であった記憶が大分あいまいになり始めていた。

（私が…どんどん…消えて…いく…私が…好きなの？誰？何が…好き？）

好きだった者の名前も思い出せなくなり、新たな記憶が書き込まれていく。

（私…はこのダンジョン…の為に…オ○ンポが…好き…で…精…子ほし…い）

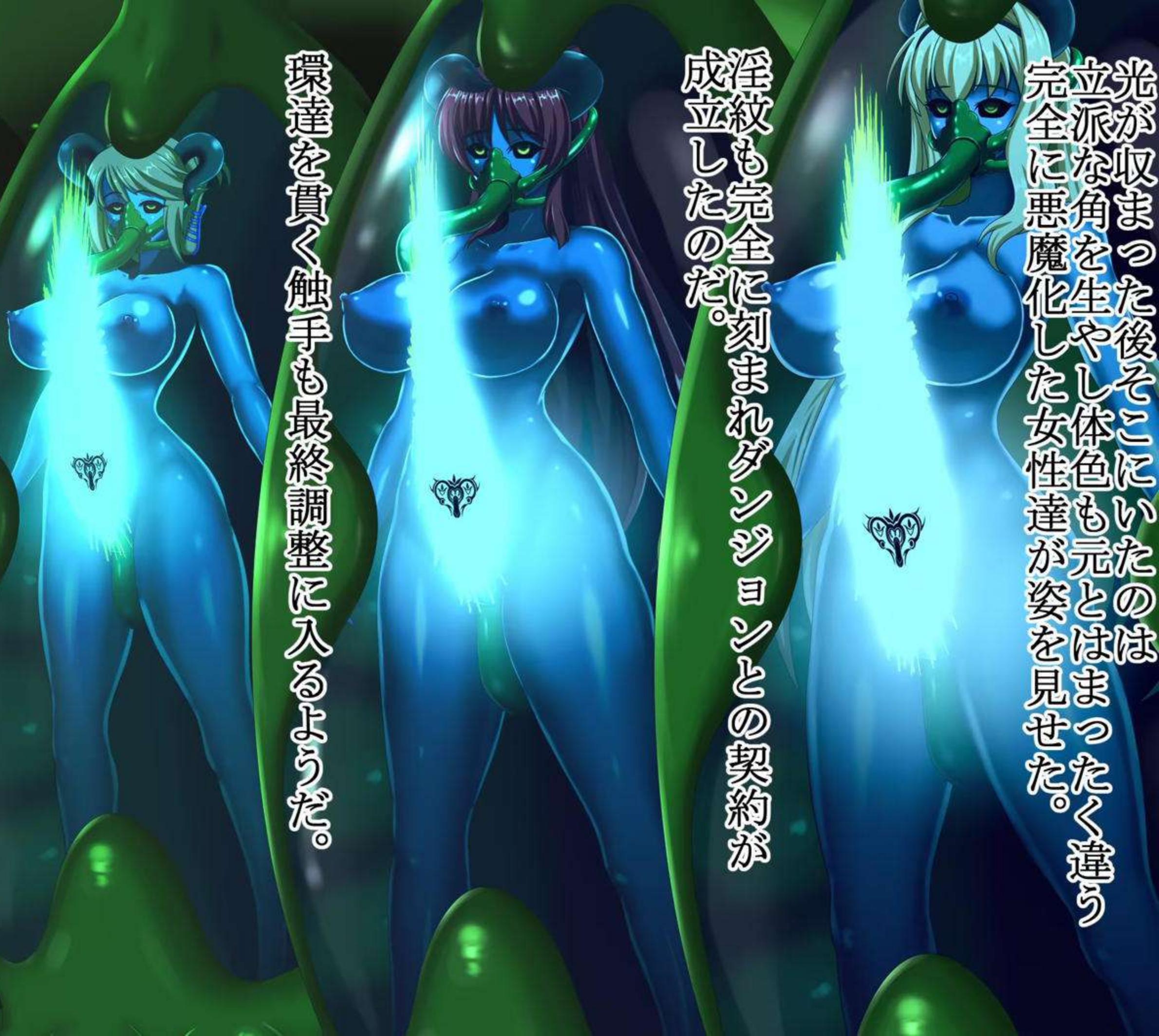


突如環達の体が眩しい光に包まれる。
この光が収まった時
女性達は新たな生まれ変わるのだ。

光が収まった後そこには立派な角を生やし体色も完全に悪魔化した女性達が姿を見せた。完全にはまったく違う

淫紋も完全に刻まれダンジョンとの契約が成立したのだ。

環達を貫く触手も最終調整に入るようだ。





触手の動きも止まり廻りは大分静かになった。
刻まれた淫紋が怪しく輝き、その時を待って
いるかのようだ。

股間の触手も引き抜かれ、
遂にその時が来たようだ。

次々と培養槽の蓋が開き外へ出る悪魔達。
そして環達の培養槽が開かれた。



環達は外へ出る。
不気味に輝く目、青い肌、立派な角。

元の美しさとはまた別の
妖艶さを露にし、彼女達は新たに刻まれた
命令を遂行するため、ダンジョンへと歩む。

「私ノ身モ心モ、ダンジョンノ為ニ…」





























































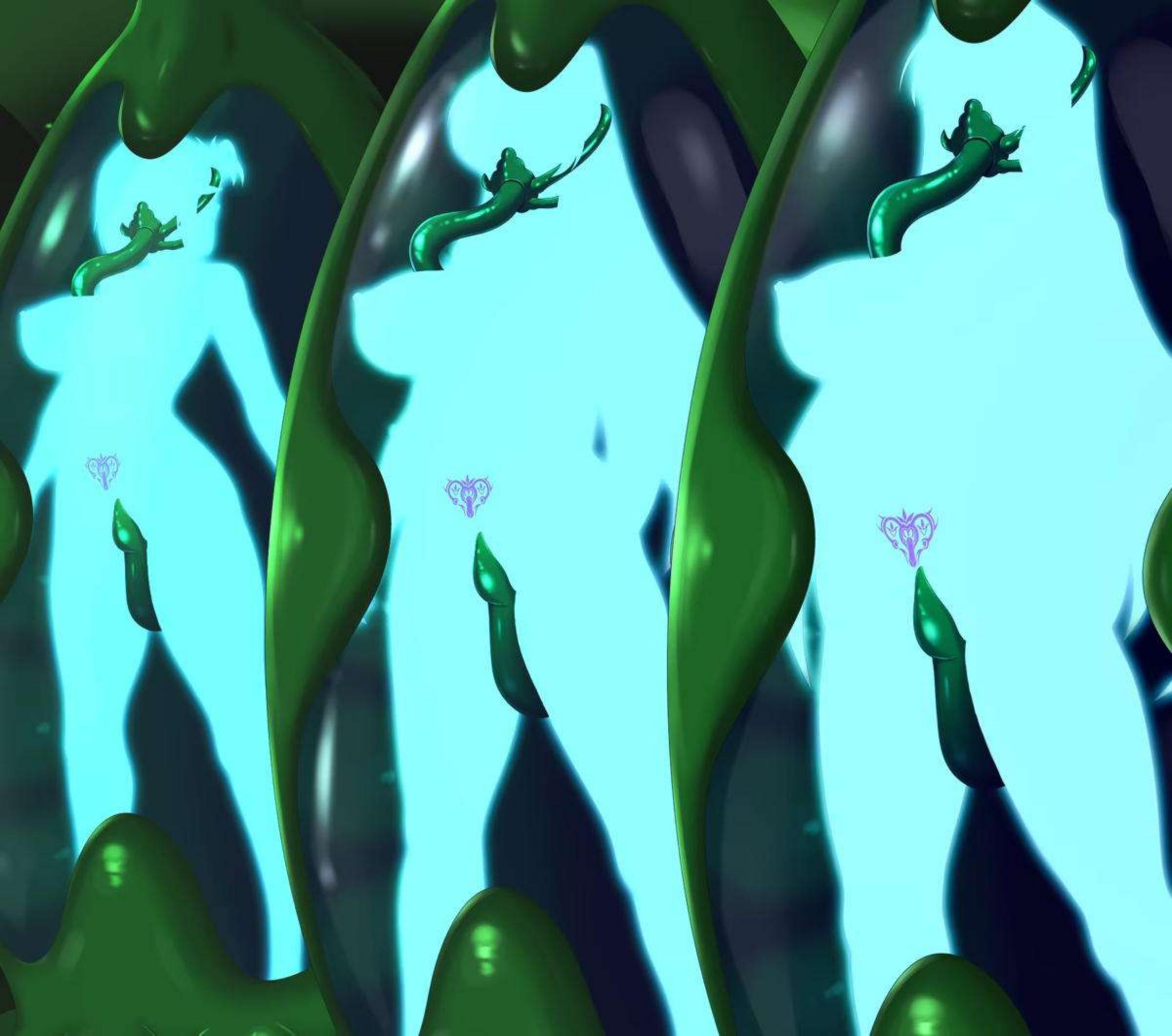
























「こいつら……多すぎる……!!」

行方不明者を探してほしいという
クエストを受け
ダンジョンへ赴いた環。

しかし、そこは触手型モンスターの
巣窟となっており、あまりの数の多さに
逃走している最中であつた。



「や……! ヤダっ! そんなものかけてこないで!」
追ってききた触手達が次々と環に向かって
液体を浴びせかける。
みるみるうちにドロドロにされていく
その肢体に刺激されていっているのか
触手の動きも活発になつていようだ。

「このままじゃ……どうしよう……振り切れるまで
がんばるか……それとも身を隠すべきか……」



「は…離し…てっ！」

小部屋に隠れてやり過ぎそうと思いつたままではいいが、逆に待ち伏せされ、あつとゆうまに体の自由を奪われる環。

「あつ！だ…だめっ！そんなとこ…！」

次々に絡みついてくる触手に抗おうとするも抵抗空しく全身を拘束され足を大きく開いた格好にされた。



「ああ……そこはだめえっ！やめ……っ！くああっ！」

足を開かされ秘部が露になつたところにて、勢いよく触手が迫り、無駄な抵抗を試みるも一瞬で貫かれ悲鳴をあげる環。

粘液塗れの触手はレオタードを物ともせず一気に環の奥まで貫くと激しく突き上げる。

「あうっ！あううっ！激しいっ！
ダメ……！やめ……ああっ！」



「あつ！あうつ！あうつ！あうつ！あうつ！」

触手の猛攻に喘ぐ環。
そして不意にその攻撃がとまり奇妙な痙攣をする触手。
その行動に気付きたまらず叫ぶ。

「だめえつ！それはつ！出さないで……つ！
あつ！あああつ！」

そんな事などお構い無しに触手は凄まじい勢いで
環の中へ液体をぶちまけた。





中に大量に注ぎ込まれ、そのシヨツクで少し意識を失つていたが、すぐにまた激しい突き上げが始まる。口のほうにも触手がねじ込まれ上下でせめられていた。

「むぐらう……! おぐつ! むおつ! おぶつ!」

くぐもつた声を出しながらも必死に抵抗する環。だが、それが無駄な行為であることは明確であつた。

「んぐおおおおつ！おぶうつ！おぶうつ！むぐおおおおつ！」

また触手の大量射精が環を襲う。今度は下だけだけでなく上のほうも注ぎ込まれ口の中はあつといふ間に液体で満たされるがそれでも止まる気配がない。

回の端から溢れ出ているものもの
それでも収まらない液体を
処理する方法が飲み込む以外になく環は一心不乱に
飲み込んでゆく。ごくごくつと喉を鳴らしながら
飲み込み、その射精が終わるのを耐えていた。



「う……うええええ……おぶ……あああ……」

口元の触手が引き抜かれ環の口から大量の液体が溢れ出る。飲み込みきれなかつたものを滴らせながら呻く。

しかし、依然として下の方は射精されつつづけている。
「ああ……まだ……でてる……まだ……出されちゃう……」

周りを見渡ししながら、まだこの陵辱が終わらないことを朦朧とした意識の中で感じていた。



どれくらい時間が経ったのか。未だに終わることなく触手達による陵辱は続いていった。すでに諦めたのか環の瞳には光はなくなり完全に身を任せられている状態であつた。

「ああう……また……たくさん……注がれちゃつた……でも……気持ち……いいから……良いかな……。」

触手の責めに完全に屈服した環。触手達の苗床になり孕むのも時間の問題である。

「いんな…私をどうするつもり…！」

足を大きく開かれ宙吊りにされる環。
抵抗しててもりなのか体を一生懸命に動かすが
艶かしく誘っているようにしか見えなかつた。

それに反応したのか、怪しく動く触手が
環に襲い掛かる。あの場所へ。
蜜を溢れさせる。



「あぁんっ！」

大きく悲鳴をあげる環。
太い触手が一瞬で一番奥まで侵入してきたのだ。
そして始まる激しいピストン。

大きな胸をぶるんぶるんと揺らし
環の体は激しく上下される。

「あっ！あっ！あっ！うあっ！あうっ！」





「あつー!やあつー!これ…っすぞ!…いつ!」
いきなりの激しい責めに堪らず声を荒げる。
レオタードごと秘部を貫かれ
結合部からは蜜が漏れ出す。

だめえっ!こんな…のっ!耐えられない…っ!」

触手のあまりにもな攻撃に成すすべなく
あつとという間に絶頂へと促される。

「イクうつ！イクイクうつ！イクうつちやううつ！」
環の叫びに反応するかのようになり、触手の動きも
より激しくなり、とどめを刺すかのようになり、
突き上げる。

「あああああああーっ！」

大きく声をあげ、絶頂を迎える環。

それを見計らったように

一番奥で射精を開始する触手。

どぶっ！どぶっ！と大量に注ぎ込んでゆく。

「あふあああ……うんん……んおお……ん！」
触手が環から引き抜かれ、ぽっつと音を出しながら
液体が溢れ出る。艶かしい声をあげながら
荒い息遣いで艶かしい声をあげながら
その余韻に浸る環。

「……ハア……ハア……ま……まだくるの……？」

下方で蠢く触手を眺めながらも、なんとか
脱出の機会はないか模索しようとする。

不意に周りが暗くなり辺りを見渡そうとする環。

「え…なんか…辺りが暗く…？なにが…」

そう思ったときには既に遅く脅威は真上から来ていた。



不意に周りが暗くなり辺りを見渡そうとする環。

「え…なんか…辺りが暗く…？なにが…」

そう思ったときには既に遅く脅威は真上から来ていた。



上から襲い掛かってきたものは環の上半身を
一気に飲み込んだ。

「ぐもおおおっ……うぐ……っ！んぐお……！」

下ばかりに注意を向けすぎて上からくるとは夢にも
思わなかつたのか、環は自分の不注意さに
嘆こうとするも、今はそんな場合ではない。
くぐもった叫び声をあげながら必死にもがく。
しかし下半身だけではどうしようもなく
無様にジタバタと足を動かすことしかなない。



上から襲い掛かってきたものは環の上半身を
一気に飲み込んだ。

「ぐもおおおっ……うぐ……っ！んぐお……！」

下ばかりに注意を向けすぎて上からくるとは夢にも
思わなかつたのか、環は自分の不注意さに
嘆こうとするも、今はそんな場合ではない。
くぐもった叫び声をあげながら必死にもがく。
しかし下半身だけではどうしようもなく
無様にジタバタと足を動かすことしかなない。

そうこうしてしている内に
体はどんどんと飲み込まれてゆく。

「……ア……うお……っ！ん……。」

後は足先だけが見える状態になったときには
もう身じろぎもせず
ぐったりとしたようになっていた。

「……」

もはや叫び声も聞こえず、環を完全に飲み込んだ
そのモンスターはゆつくりと
ダンジョンの奥へと消えて行った。



「この粘液…離れない…!!こんな格好で動けないなんて…!」

そのモンスターは環に粘液を絡みつけ手足を広げた状態で固定させた。

「んん…!!取れない…!!こんなもの…!!」

必死に抗うもまったく身動きが取れない状況に困惑する環。その状況の中モンスターは目の前まで迫ってくる。



大きな袋状の部分から触手が伸び環の秘部を粘液をこすりつけながら撫で回す。

「や…やめてっ！どろどろを擦り付けないでっ！」

ささやかな抵抗を試みるも、この姿ではただ腰を振っているだけにしかならず

その姿に刺激を受け

触手の動きも活発になる。

そしてひとしきり愛撫した触手は

ゆっくりと環の中に侵入し始めた。

「あああ……っ！入って……くるうっ！

挿入された触手はゆっくりと環の中を
探るように動き始める。

「あうう……あ……っ！

なにを……しようとしてるの……？」

疑問に思う環はふと袋状のものを見つめる。
その半透明な物体の中に丸いものがたくさん
入っていることに気付く。

「あれは……？もしかして……卵……？……まさか
私にあれを産みつける気……？」



そう気付いたのも束の間

「んあああつ！何かが私の中に……！」

その卵が環に送り込まれ始めた。

太い触手の中を通り次々と大きな卵が環の中へと産みつけられてゆく。

やだあ……やめて……やめて……産み付けないでえ」

無駄な懇願をするもひとつ、またひとつと送り込まれるのをただ必死に耐えるしかなかった。

やっと産卵が終わったのだらうか。
目の前の空っぽになった袋状の
部分を見つめ環は嘆く。

「あああ……産み付けられちゃった……
たくさん……いやあ……誰か……誰か助けて……」

いつもの気丈な彼女からは考えられないほど
弱りきり悲観にくれる環。
しかし、その願いは誰にも届かない。
その小さな声も闇の中へ吸い込まれていった。





その後環はモンスターの巢に持ち帰られ
その場所として利用されていた。
その場所は巢穴が複数あった
その一つ一つに苗床となつた
女性がおおり叫び声や
喘ぎ声が聞こえていた。

環も既に何回かの出産を経験し
今はまた大きくされたお腹の中に
卵を送り込まれていた。

「あうっ！あうっ！あうっ！あぐうっ！
また…！入っってくるうっ！
卵がつっ！あひいっ！気持ちいいっ！」
完全に苗床にされた環。快樂に溺れ
自分が何者かすらも考えず
ただひたすらに喘ぎ、叫ぶ。

「もっ！もっ！もっ！もっ！もっ！もっ！
産みますうっ！産みたいのおっ！」
以前の凛々しかった面影は一切なく、
苗床の一っとなった環は
ここで永遠にモンスターを
産み続けるであろう…。



触手に散々陵辱された後、
ダンジヨンのとある部屋に運ばれ
培養槽に環は入れられていた。
周りにも複数ある培養槽の中には
行方不明になった女性達の姿が見える。
ここはその女性達を
モンスターに変える施設だった。

環を含め、どの女性も
触手のようなマスクを着けられ虚ろな表情で
培養槽の中で佇んでいた。



しばらくとすると、股の間から怪しく発光する触手が現れた。次々と女性達を貫いてゆく。



「おぐうっ！」

「あうっ！」

「ああうっ！」

次々と悲鳴をあげる女性達、環も例外なく貫かれ奥まで満たされる。



The image depicts three anime-style female characters standing in a dark, green, tentacle-filled environment. Each character is nude and has a green tentacle wrapped around her mouth. The character on the left has short blonde hair and blue eyes. The character in the center has long purple hair and green eyes. The character on the right has long blonde hair and blue eyes. The background is dark with large, glowing green tentacles and a large green egg-like object at the bottom center.

そして始まる変化の儀式。
挿入された触手は杭打ち器のように動き
女性達をゆつくりと突き上げてゆく。

特殊な力が働いてるのであるだろうか
体内の触手が発光し外側からでも目視できる。

それが明滅しながら女性達を刺激していった。

「おうっ！おおお！？おぐおっ！おうっ！」
環を含め女性達の喘ぎ声が変わった。
それと同時に触手の輝きが変わり
より激しく光を放つ。

ピストン速度や体中に伝わる光の衝撃が
変化したのだらう。

その衝撃による味わったことのない快樂に
女性達は獣のように叫び続ける。

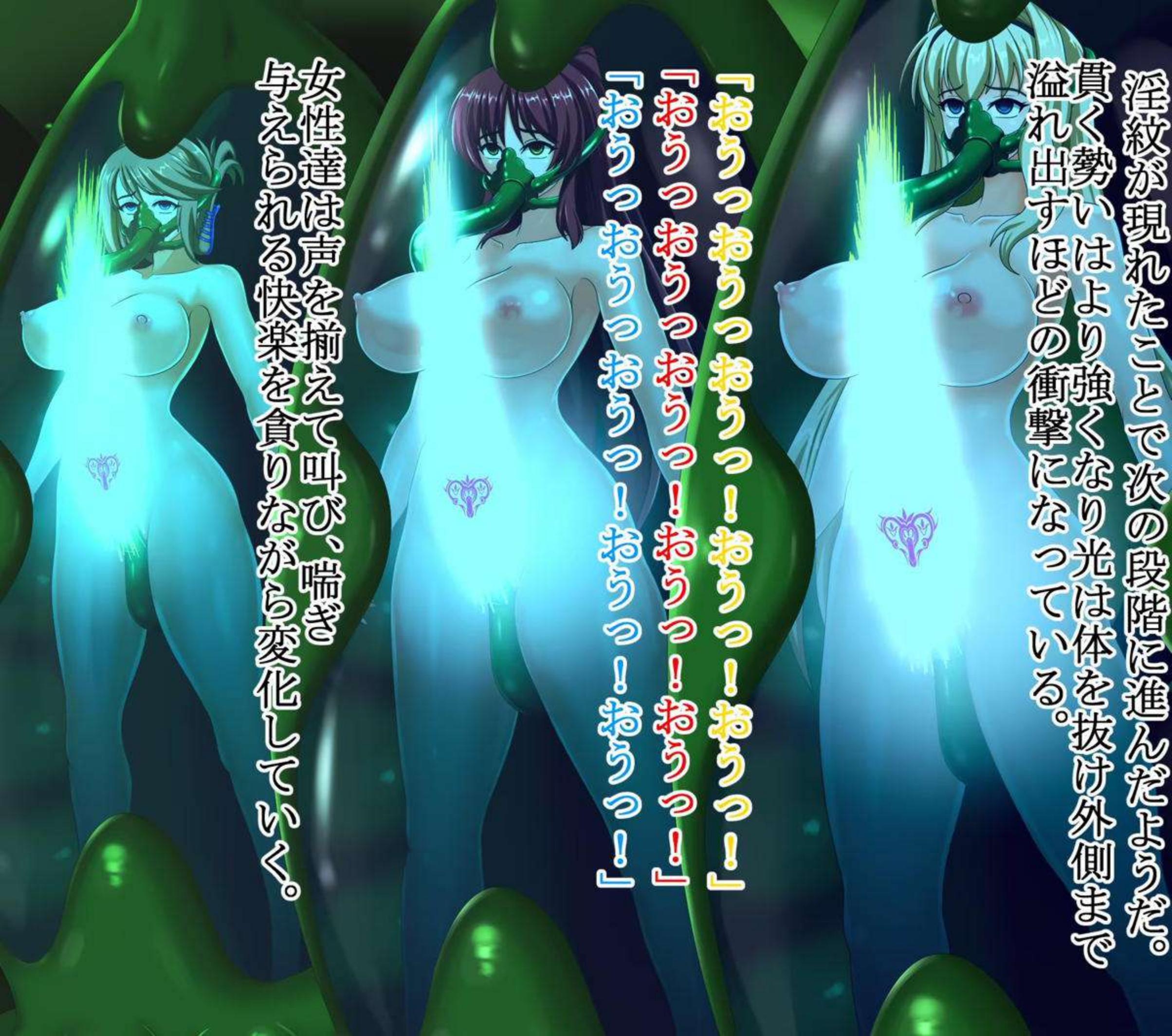
「おおっ！ぐおんっ！おぐっ！おおおっ！」

触手が挿入され快楽を与えられてからしばらく経つた頃変化が訪れる。

お腹の部分に紋様が現れ始めたのだ。順調に変化が進んでる証拠なのだ。このダンジョンとの契約の証なのだ。

この淫紋が完全に刻まれたときに女性達は完全に変わっているだろう。

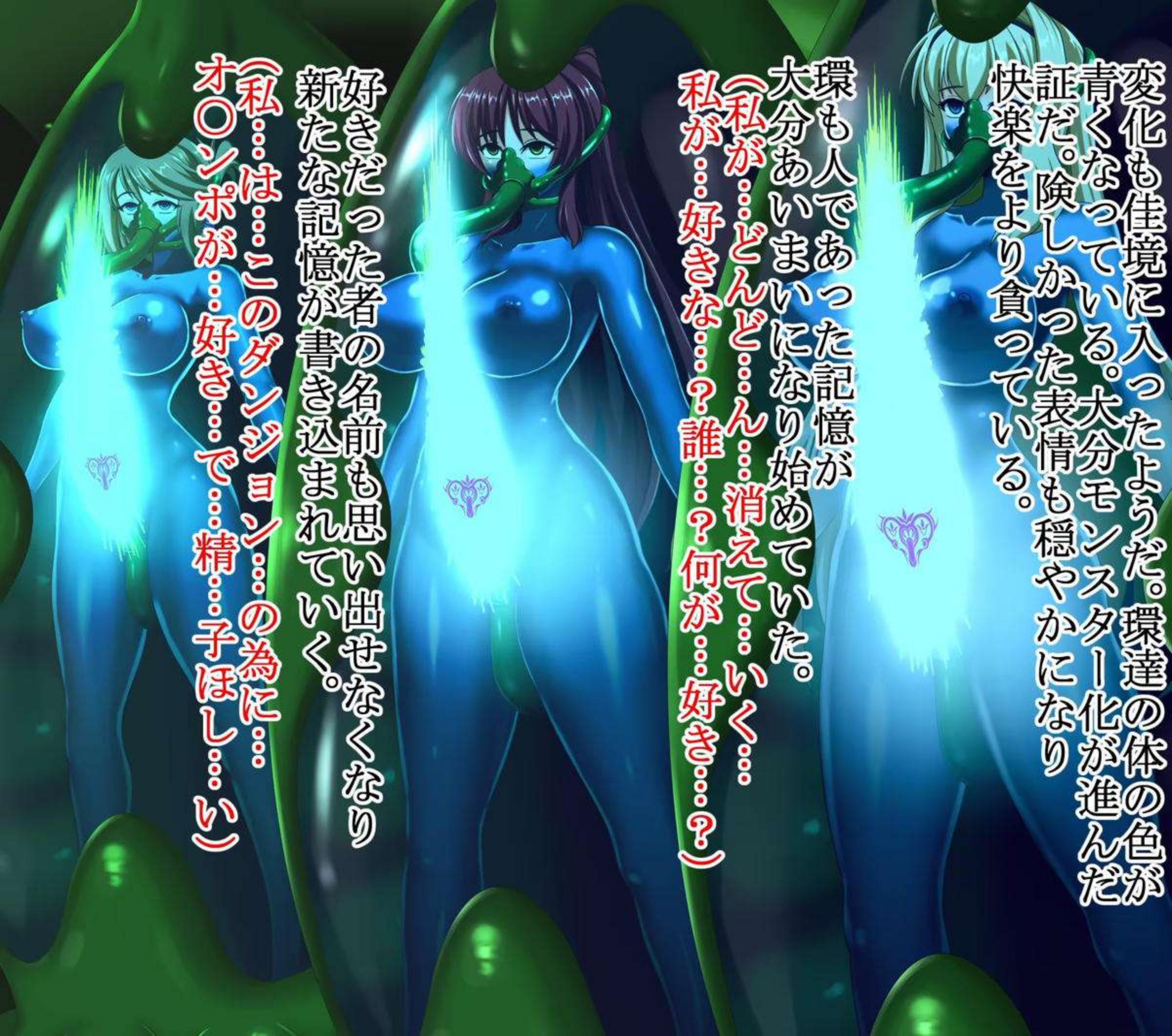




淫紋が現れたことで次の段階に進んだようだ。
貫く勢いはより強くなり光は体を抜け外側まで
溢れ出すほどの衝撃になっている。

「おうっおうっおうっ！おうっ！おうっ！」
「おうっおうっおうっ！おうっ！おうっ！」
「おうっおうっおうっ！おうっ！おうっ！」

女性達は声を揃えて叫び、喘ぎ
与えられる快樂を貪りながら変化していく。



変化も佳境に入ったようだ。環達の体の色が青くなっている。大分モンスタ―化が進んだ証だ。険しかった表情も穏やかになり、快樂をより貪っている。

環も人であった記憶が大分あいまいになり始めていた。

（私が…どんどん…消えて…いく…私が…好きなの？誰？何が…好き…？）

好きだった者の名前も思い出せなくなり、新たな記憶が書き込まれていく。

（私…はこのダンジョン…の為に…オ○ンポが…好き…で…精…子ほし…い）

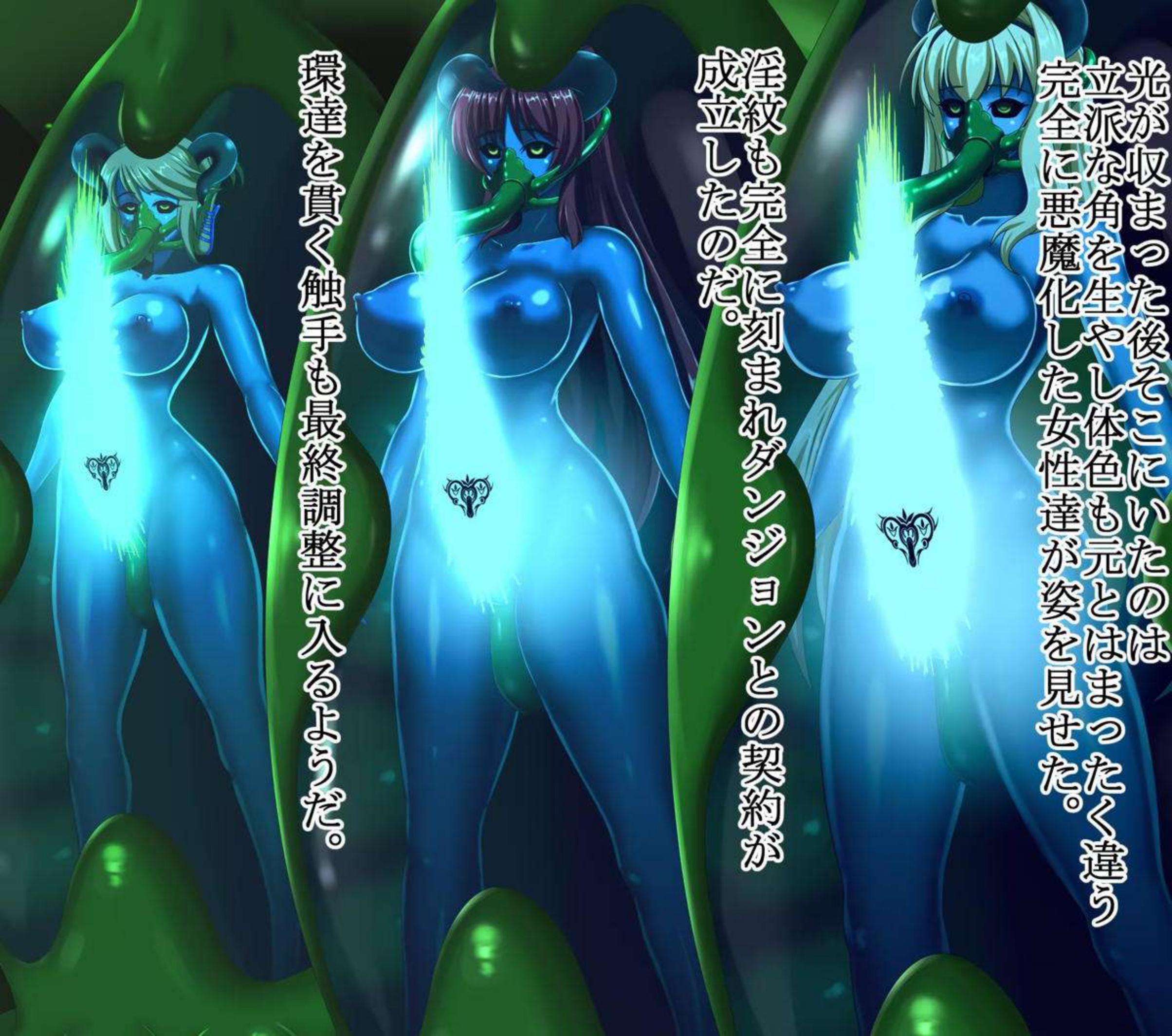


突如環達の体が眩しい光に包まれる。
この光が収まった時
女性達は新たな生まれ変わるのだ。

光が収まった後そこにいたのは立派な角を生やし体色も元とはまったく違う完全に悪魔化した女性達が見せた。

淫紋も完全に刻まれダンジョンとの契約が成立したのだ。

環達を貫く触手も最終調整に入るようだ。





触手の動きも止まり辺りは大分静かになった。
刻まれた淫紋が怪しく輝き、その時を待って
いるかのようだ。

股間の触手も引き抜かれ、
遂にその時が来たようだ。

次々と培養槽の蓋が開き外へ出る悪魔達。
そして環達の培養槽が開かれた。



環達は外へ出る。
不気味に輝く目、青い肌、立派な角。

元の美しさとはまた別の
妖艶さを露にし、彼女達は新たに刻まれた
命令を遂行するため、ダンジョンへと歩む。

「私ノ身モ心モ、ダンジョンノ為ニ…」







































































